ハーバート・スペンサーの哲学と進化論

築山　修道

一　スペンサーの哲学の基本的立場と性格

ハーバート・スペンサー（一八二〇―一九〇三）の哲学は基本的にはJ・ロックやD・ヒューム等によって確立され発展したいわゆる英国経験論の流れに位置する。スペンサーは我々の認識可能な範囲を人間の意識に現われる限りの事物、即ち経験的世界の諸現象に限定し、事物をそれ自体において認識すること、即ちもの自体の知識若しくは実在そのものの認識は不可能であるという不可知論の立場を取っている。従ってかかる認識論的立場は、我々の認識の対象となる経験的世界の諸事象を我々の意識に与えられた現象としてそれ自体において、即ち現象を現象として把握すべきであるという立場である。それは、経験的現象を説明するために経験を超えた超越的実在（神或は絶対者）若しくは形而上学的原理を導入しようとする立場ではなく、経験をどこまでも経験に即し経験に内在的なる原因乃至理由或は法則によって把握しようとする知識の立場である。言換すれば、経験的世界を背後世界との関係においてではなく、世界から且つ世界に即して認識し説明しようとする立場である。そしてかかる認識論立場と方法を代表する知識の立場は総じて科学である。科学的認識の立場と方法論の確立によって、世界は世界としてそれ自身から対象的・客観的に見られることが可能となった。つまり、かかる世界は、自己が今此処に現存する場所として、見る自己そのものを現にそのうちに含んでいる如き自己と一つに動き見られる世界ではなく、見る自己それ自身はあたかも世界の外に立

って世界を見ている如き立場から、そのような世界と対向する自己に対して現われる対象的世界（実はそれは世界像）である。一層原理的に言えば、世界は、意識の場における主観―客観の対立を前提としつつ、しかも主観との関係を断切って、客観から且つ客観としてそれ自身において純粋に見られるようになったということである。このような世界観若しくは世界像は世界乃至存在の一つの見方考え方であるが、上述の如き意味における対象的・客観的世界の見方に徹底して一定の確実な知識を獲得しようとするのが科学の立場である。（尤も、科学者自身は自らの立場が認識のこのような基礎的構造をもって成立していることを明確に自覚しているとは言われない。むしろ科学的認識の基礎的構造を明らかにする知的作業は哲学の仕事である。

デカルト以後の西洋における近代哲学の新たな出発点を我々は認識論としての哲学の成立に求めることが出来るのであるが、その認識論としての哲学は、自らの課題として知識の方法論的懐疑を通して、確かな知識の出発点、我々の認識一般の可能性、起源、妥当性等を主題的に問うた。然るに、そのことによって同時に科学的認識の基礎づけもなされ得たのである。そして科学的知識は哲学によってその認識論的基礎づけが行われた近世以降様々な方面に分化し諸科学として急速に発展し始めたのである。）

スペンサーは、科学的認識の範囲と限界及び科学者について次のように語り、自分の探究が科学的認識とその対象の範囲内に限定されるべきものであることを、当時の人々からも誤解を受けないように力説するのである。

この議論（進化論）がもつ存在論的意味について二、三つけ加えねばならぬ。かなり多くの人々は、いずれの時代においても哲学を悩ませた大問題の解決を私がここ（「進歩について――その法則と原因」）で企てていると思うであろう。しかし、そのように誤解してはならない。科学の範囲と限界を知らぬ人だけがこういう重大な過ちを犯す。先に述べた（一切の進歩の法則と原因についての）一般化というのは、人間の意識に現われる限りの事物の発生について当てはまるもので、事物そのものの発生についてではない。多くのことを述べて来たが、それでもやはり、究極の神秘は前と変わらずに残る。説明出来るものを説明することは、背後に残るものが説明出来ぬことをいっそう明らかにするだけである。[1] こうして彼（誠実な科学者）は、内的なものも外的なものも、その究極の起源や本性が等しく不可解であることを悟る。……彼の研究は、どの方向においても、結局彼を不可知なものに直面させる。……彼は人間知性の偉大と卑小を同時に学ぶ。すなわ

ち、経験の範囲内に入る一切を扱う知性の能力と、経験を超える一切を扱う際のその無力を同時に学ぶ。彼は、他のいかなる人も感じ得ないほど強烈に、それ自体として考えると最も単純な事実も全く理解不可能であると感ずる。絶対的知識が不可能であることを、彼だけは本当に見る。すべてのものの下に測り知れぬ神秘があることを、彼だけは本当に知っているのである[2]（　）の中及び傍点は筆者付記）。

スペンサーは科学的認識の可能性と限界及びその存在論的意味についてこのように半ば消極的に語ると同時に、他方で、経験的世界に関する限り、基礎的知識としての科学の価値を最高に評価する。

最も価値ある知識は何かという最初の問いに対する答えは、終始一貫「科学」である。これこそ全問題に対する回答である。直接的自己保存、すなわち、生命と健康にとって最も重要な知識、それは「科学」である。間接的自己保存、つまりいわゆる生活手段の獲得にとり最も貴重な知識、それは「科学」である。親の機能を正当に果すための正しい手引き、それは「科学」においてのみ見出される。市民の行為の正しい規正に必要な過去現在の国民生活の説明、この説明にとって不可欠の鍵、それも「科学」である。同様に、あらゆる芸術の最も完全な制作及び最高の享受に要する準備、それもまた「科学」である。知育、徳育、宗教教育という目的に最も有効な研究、それもまた「科学」なのである。……科学の真理は必然的であり永遠である。それ故に、全科学は全時代を通じ全人間の利害に関わる。身体的、精神的、社会的な生活の科学を理解し、他の一切の科学を生活の科学の鍵として理解することは、人の行為にとり常に測り知れぬ重要性を持つに違いない[3]。

科学を人間的生活、倫理、文化、芸術及び宗教万般の基礎と見做し、科学的知識がそれらの成立及び発展に不可欠なものとして大いなる原動力となって来たことを力説するスペンサーのいわば「汎科学主義」は、彼が少年時代に父親から熏陶を受けたエクセントリックな科学尊重の態度及び教育に由来するところ少なからぬものがあったと考えられる[4]。そしてこのことは、元来スペンサーが数学（幾何学と力学）と自然科学に関心をもっていたことと相俟って[5]、彼をして科学的思考へと志向せしめ、かくして彼の哲学を「科学哲学」として限定し方向づけることになった。

スペンサーの哲学は、既に見たようにその基本的立場としては英国経験論の系譜に属し、実在を前提としながらも実在そのものの認識は人間には不可能であるとする不可知

論に立つ。そして思考の方法及び性質という観点からは、それは、自覚的―反省的―分析的というよりもむしろ対象的―分析的―構成的であって、我々は哲学としてのその全体的性格を「科学哲学」として特色づけることが妥当であろう。しかしスペンサーの哲学のかかる立場（経験論）と性格（科学哲学）との間には、実は密接な連関があり、しかもそれは哲学的に重要な問題を含んでいると考えられる。つまり、科学哲学はF・ベイコン以来英国経験論の伝統的傾向であるが、そこには如何なる哲学的事象が伏在しているのであろうか。英国の経験論的不可知論は、実在を認めながらもそれ自体の認識は不可能であるとする根本的立場から、認識可能な経験的世界の諸現象の基礎を我々に直接与えられた且つ最も具体的な経験としての感覚に求め、むしろかかる感覚を実在と見做すのである。然るに、このような意味における感覚は、外界の事物が我々の感官を触発し、そのことによっていわば白紙状態の心に刻印された事物の印象として成立するものと考えられているが故に、その根底には物質的実在が想定されており、その意味で唯物論に通底するところがある。

他方、科学は、その対象を経験界に限定し、経験的世界の諸現象を因果律に従って分析し、諸現象間に内在しそれらを内から支配している不変的諸法則を把握し確定する、そしてその法則から個々の諸現象を合理的に認識し説明しようとする。然るに、科学的認識の認識対象界たる経験的諸現象とは、元来直感の形式（時間、空間）によって我々に与えられた内容が認識主観によって既に何らかの意味において構成されたものと考えられるが故に、それは、もの自体としての自在的存在ではなく、主―客の対立を前提とし、感覚若しくは知覚を基盤にして主観に対して現前する、対象化され客体化されたものとしての、即ち物象化された存在である。そして科学はこのような意味における対象存在をどこまでも対象としてそれ自体において認識しようとする。つまり、科学は物象化された存在をどこまでも物象化して把捉する。科学的認識の客観的妥当性、普遍性なるものは、基本的には万有に対する我々主観のこのような関わり方、態度及び見方の自覚的・方法論的遂行によってもたらされるのである。ここに科学的知識一般の可能性の限界と共にその特質が存する。つまり、科学的認識の限界は、一切の存在を物象化し、そのことによってすべての現象を物質に還元して、物質的概念によって把握し説明しようとするところに存する。それ故、その限界は立場そのものに本質的に含まれた限界性である。そしてそのことは、より

端的に言えば、科学的立場が自らの存立条件とし、前提にしている科学的物質主義の限界性であると言い得るであろう。科学のかかる限界性は、殊に生命的、精神的、主体的諸事象の理解・究明に関しては明確に自覚されなければならない。このように英国経験論の哲学と科学の立場には、その可能範囲と限界、就中その根底に唯物論的立場を共に含んでいるという点で両者相通底し、更に、J・ロックやD・ヒューム等による経験学派の認識論的基礎づけを通して、経験諸科学が自らの方法論を見い出しつつ成立し発展して来たという点において、両者は密接な関係をもっている。

ところで、かかる限界にも拘わらず科学的知識は、それの限界内においてそれ自身の客観的妥当性、普遍性、確実性、有効性等をもち得るのである。正しくこれがためにスペンサーは、科学的知識に知識としての最高の価値を認め、種々なる領域におけるそれの重要性や有用性を力説し、かかる知識を修得せんがための科学教育の重視を奨励するのである。そして科学の有用性若しくは実利性に関して、スペンサーは消極的な働きと積極的な働きの両面を看取している。ネガティブな有用性においては科学の宗教に対する関係が特に重要な意味をもつと考えられる。科学と宗教の関係一般についてスペンサーは積極的な論究をしていない。また彼の哲学的立場からはそのような試みは困難であろう。つまり、宗教的、形而上学的問題は最初から彼の思考の射程外に置かれていて、究明すべき積極的な課題とは本来なり得ないのである。しかし、両者の消極的な関係についてはスペンサーも言及している。

「真の科学と真の宗教は双生の姉妹で、引き離せば確実に両方とも死にます。科学の成功は、その宗教性に正確に比例し、宗教の繁栄は、その基盤の科学的な深さと堅固さに正確に比例します。哲学者の偉大な業績は知性の成果ではありません。むしろ、勝れて宗教的な精神的態度によって知性が導かれた成果であります。真理は、哲学者の論理の鋭さに応じたのではなく、むしろその忍耐力、愛、誠意、自制に応じたのです。」[6]

科学は普通考えられるように反宗教的なものではない。否、科学の無視こそ反宗教的であり、環境世界の研究を拒むことこそ反宗教的なのである。……

真の科学が本質的に宗教的である理由は以上に尽きない。万物に見られる作用の斉一に対する深い尊敬と暗黙の信頼を生み出すという理由によっても、科学は宗教的である。人間が自らの不従順を忘れて漠然と望み、漠然と嫌う伝統的信仰の賞罰の代わりに、科学者は、神により定められた事物の構

造に内在する賞罰、不従順が否応なく生む悪い結果を知る。人間の従うべき法則を冷酷なもの、しかし同時に慈悲深いものとして知る。法則に従う限り、事物のプロセスがより大きな完全性、より高度の幸福へと向かうことを知る。それ故に、彼は絶えず法則に固執するようになり、法則の無視には憤りを感ずる。こうして科学者は、事物の永遠の原理、それに従う必要を説き、自らの本質的宗教性を証明するのである。……人間自身、及び存在の神秘に対する人間の関係について、科学のみが真の概念を与え得る。科学は認識出来る一切を示すが、同時に、それ以上には何も認識出来ぬ限界をも示す。ドグマティックな断定によって事物の「究極的原因」の不可知を教えるのではなく、超越不可能な種々の境界へとわれわれを誘い、その不可知を明瞭に認めさせる。超越的なものに向かう人間知性の卑小を他の何ものにも増して強く自覚させる。……誠実な科学者〔単なる距離の計算、化合物の分析、種の分類に携わる人のことではなく、低次の真理を介して高次の真理を求め、究極的には最高の真理を求める人を意味する〕、すなわち真の科学者のみが、「自然」「生命」「思考」として現われる宇宙的力は人間の知識、人間の思考の彼岸にあることを本当に知り得る。[7]

科学の宗教に対する右の見解において特に留意すべきことは、「真の科学乃至科学者」並びに「真の宗教」という言表によって何が意味されているかということである。ここに言われている「真の科学乃至科学者」とは、諸現象の単なる個別的な解明にのみ終止せず、現象の個別的な研究を通してそれらを根底から支配するより根本的、包括的、普遍的な法則を探究し、究極的には最高の真理を探求せんとすること若しくは人を意味するであろう。スペンサー自身の言葉を籍れば、それは、普通の狭い意味ではなく、最も広い最も重要な意味をもつ、表面を突き抜け深みに達した真の科学のことである。[8] そしてそれは、帰趨するところ「科学哲学」を意味することになるであろう（科学哲学については後述する）。他方、「真の宗教」とは、人格神を中心とする三位一体の伝統的キリスト教若しくは英国国教会の信仰ではなく、自然的或は宇宙的力及び法則を神的力及び秩序と根元的には一致するものと見る如き非人格神的、自然神学的な宗教が意味されている。そして「宗教性」或は「宗教的」であるとは、人が自我中心的・恣意的なあり方を断念して、どこまでも事実若しくは法則（＝神的秩序）に従順になろうとする自己否定的・敬虔的なあり方を指し示している。しかしこのことは、スペンサーが神若しくは宗教の超越性を否定している、と直ちに考えてはならない。科学と宗教に関する上述の如きスペンサーの見解は、一層

根本的には両者の関係に関する彼の存在論的な前理解或は要請とも言うべく次のような見方に依拠していると考えられる。つまり、科学と宗教は同一事実の相反的な両面を表現する。前者は事実の可視的、可変的な側面に関わる諸真理の組織体であり、絶えず成長し且つ精錬されて行く。後者は不可視的、永遠的な側面に関わる真理を表現する。そして両者がいずれも事物のリアリティに基礎を有する限り、絶対に相反する真理の二秩序は存在し得ないが故に、科学と宗教の間には根本的な調和若しくは融合が存しなければならないという見解である。しかし両者がこのような共通の地盤を見い出し得るのは、それぞれの領域における個々の観念の次元ではなく、最も高次的、普遍的な真理の次元においてのみである。[9] と言うのも、信仰は科学的認識の範囲を越えて存立し得るので、個々の事象に関する観念或は真理の次元においては両者の関係はしばしば相反し、排他的になることすらあるからである。科学と宗教に関する通常の狭い知見は、かかる次元における両者の関係を捉えた見解である。然るにスペンサーによれば、一層高次元の真理における両者は合致すべきはずであり、そしてそこに正しく「真の科学」と「真の宗教」の双生的関係が見い出され得る。即ち、科学的知識の進歩・増大は全体として人間を迷信や呪物崇拝から解放したのみならず、神の宇宙創造の偉大さを洞察する力を我々に与えてくれた、[10] と言うのである。

以上、科学と宗教の関係について長い文章を引用しいささか長考し過ぎた嫌いはあるが、しかし進化思想を問題にしようとするとき、両者の関係は特に重要な意味をもつと考えられるからである。

さて、科学の有用性のもう一方の面、即ち科学的知識がそれ自体で積極的に働く範域は経験的世界の現象全般に及ぶ。換言すれば、科学本来の領域は経験界であり、経験的世界における人間の営為全般にわたって、それは個人的にも且つ社会的にも時と処を越えて広大の利益をもたらす。そしてそれが科学の普遍的有用性若しくは実利性というものである。とりわけ、それが技術と結合して道具更には科学技術として活用されるときには、文化、文明を創造する主要な原動力となり、人間の環境世界を形成し変革する有力な要因として多様なかたちで作用する。スペンサーが科学の起源及び有用性について、科学的知識は常識乃至経験知と共通の地盤を共有するものであるが、しかし前者は後者よりもより確実性の高い且つ射程範囲の広大な知識として成立する。従って、科学は常識よりも確実性及び完全性

においてより勝れた予知能力をもった知識であり、科学は我々の行動に際して常識よりも一層有益な情報を提供し得る。[11] そして「文化は、科学がなければ起こり得なかったはずである[12]」という意味のことを語るとき、そこには科学に関する右のような基本的性質が認取されていたであろう。そしてそのことがスペンサーをして経験的世界の諸事象に対して汎科学主義的態度を取らせた主要な事由と考えられる。

ところで、科学が如何に有効な、それ故に最高の価値を有する知識であるとしても、それが単に個別的・具体的な知識に留まる限り、哲学的知識たり得ない。つまり、特殊科学はそれが個別的知の次元に留まる限り、知の性質上哲学とはなり得ないのである。それ故、科学が科学哲学となり得るためには、そこにより高次な知の地平を開いて来なければならぬであろう。然るに、かかる意味での高次の知とは如何なる性質の知であるのか。そしてスペンサーにそのような高次な知の開けをもたらしたものは何んであったのか。更に、それがスペンサーの哲学と本質的にどのような関わりをもっているのであろうか。高次の知とは、その真理性が個々の事象に該当し、諸事象をその本質において捉え且つ統一的に説明し得る如きより包括的、普遍的、原理的な知識でなければならぬ。そしてそれは観念若しくは概念の特殊化によってではなく、一般化の方向に開かれてくる知である。つまり、諸事象の分析的・特殊的認識によってではなく、統合的・全体的な把握によって獲得される如き真理である。スペンサーの用語を籍れば、帰納的認識によってではなく、帰納を更に演繹にまで還元することによって探求される一般的真理である。かかる立場からは個別的知識は、それぞれが相互に関連もなく個々ばらばらにあるのではなく、究極的一般的な真理の特殊化即ち個別的展開として理解され、各々が相互に内的な連関をもつことになる。従って、個別的知識は相互に有機的連関をもって一つの全体を形成し、以て部分と全体とが真に生きた連関をなす。このような意味において、高次の知即ち哲学的知とは勝義における一般的・概念的・包摂的な知である。しかし、哲学的知が開かれて来るにはそのことを可能にする根本原理の如きものがなければならぬであろう。スペンサーの場合それは、透徹した理念の一般化、そしてその基軸をなすものが「進化理論の一般化」であった。つまり、進化理論の明確化と共にそれの定式化乃至普遍化及び法則化の方向へ向って、スペンサーの思考は具体的・科学的知の地平から更に理念的・哲学的知の地平へと自らの地歩を進

め深化して行くのである。進化論との関連は後述することとして、当面の問題は、科学の立場から科学哲学の立場の成立が如何にして可能となるかということであった。そこで我々は、それを帰着するところ理念の「特殊化から一般化・一般化から特殊化」への透徹若しくは帰納を演繹へ還元するという方向によってである、と理解するのである。

然るに、かかる方向に成立するスペンサーの「科学哲学」とはどのようなものであろうか。上に見て来たように、それは、種々なる点（成立地盤、対象等）において一面経験諸科学と共有すべきものをもちながらも、知の性質上単なる個別科学ではない。また形而上学、存在論或は認識論の如き諸科学一般の成立そのものの基礎（存在或は知識一般等）を根底から論究し、以て諸科学の基礎づけという意味を自らの課題として荷っている「アプリオリのアプリオリ」若しくは「諸学の学」としての哲学でもない。それは、いわば科学と哲学の中間的立場にあって、知の性質上両者を同時に共有する如き認識乃至思考である。そしてそのことは、科学哲学がその立場の不徹底さ故に、科学と哲学の両方からそのいずれでもないとして批判されることを含意すると共に、他方ポジティブには、両者を媒介しつつ、高次の知の立場から諸現象を統合的に認識し、諸科学を整合乃至綜合し得ることを意味するであろう。事実、スペンサーの科学哲学を特質づけるものは、端的に言って、形式面においては「整合」(coordination) 乃至「綜合」(synthesis) ということであり、内容面においては「進化論」(the theory of evolution) であると言い得る。つまり、スペンサーの科学哲学は、進化論を第一原理として展開された宇宙における経験的諸現象の整合的・統合的把握、即ち進化論的綜合哲学としてその独自性を顕わにしているのである。

二　綜合哲学と進化論

スペンサーの哲学が基本的に「科学哲学」として性格づけられ、更に彼の科学哲学は「進化論的綜合哲学」として特質づけられるとするならば、進化論と綜合哲学との連関、及び進化論的綜合哲学全体の本質をどのように理解したらよいであろうか。進化論乃至進化思想と綜合哲学との密接な連関についてスペンサーの場合、我々は二つの面からこれを明らかにすることが出来るであろう。一つは、彼の思想的発展の過程を追跡することによってであり、この面からの解明にはスペンサー自筆の思想的自叙伝とも言うべく『諸観念の由来』(The Filiation of Ideas) が多くの示唆を与えてくれる。もう一つは、彼の主著『綜合哲学体系』の

全体的構成と主題の展開を追究することによってである。しかし、ここでこれら二つの面から当面の問題を詳論することは不可能であるので、差し当っては要点についてのみ論究することにしたい。

ところで、ここに言う綜合哲学の「綜合」とはどのような真理認識乃至事象の把握の仕方を指し示すのであろうか。『綜合哲学体系』におけるスペンサーの思考若しくは叙述の方法が端的にそれを表明している。即ち、それは極めて形式的に言えば、諸理念若しくは事象の「特殊的・一般的、具体的・抽象的、帰納的・演繹的」な把握・説明である。スペンサーの次のような言表はこの点と関連づけて考察することが出来るであろう。

一つの科学の完全な知識は、多くの人々によって、いくつかの科学の一般的な知識よりも教育的な原理として主張されている。しかし、それぞれの科学において、進歩は、他の諸科学が提供する諸理念に依存しているのである。物質の膠状および結晶形態に関するグレイアム教授の極めて重要な研究は、化学がさらに進歩するためには純粋化学の限界を超える必要があることを見事に例証している。[13]「成長」に関する章は、特殊な科学の真理を解釈するためにもっと一般的な諸科学の真理が引き合いに出されなければならないことの好例とその場合の方法のもう一つの例証を提供している。動植物の有機体のさまざまの種類によって示された成長の量と限界とは、生物学だけに閉じこもっている人には説明がつかない。数学と物理学とが、引き合いに出されなければならない。[14]

『生物学原理』に帰って、先ず述べたいのは、一般的なものの助けで特殊的なものを解釈する手法が、第二巻を通じて顕著に示されていることである。それは、この巻から生物学的な現象全体の演繹的な説明が始まっているからである。[15]

右の引用文はいくつかの事柄を示唆しているが、要するに、「綜合」とは、特殊な真理をより一般的・基礎的真理若しくは他の特殊的真理との整合的連関において包括的に解釈すること、換言すれば、事象を個別化しそれ自体において単独的に捉えるのではなく、部分と部合との相互依存性及び部分と全体との有機的連関において統合的に把握することである。かかる綜合的把握においては、特殊的真理は、全体（＝一般的真理）の部分として相互に密接な連関を有し、一般的真理は諸部分（＝特殊的真理）を整合的ならしめ、それらに内的統一を与える全体性である。部分は全体の部分として相互依存的にそれぞれが密接な内的連関をもち、一つの全体を形成する如きあり方を「有機的」というならば、理念若しくは事象のかかる整合的・統合的把握即

ち「綜合哲学」は、有機体若しくは有機的事象を把握するのに相応した認識の方仕であると言い得るであろう。そしてかかる意味での「綜合哲学」は、帰納的把握を演繹的把握に還元することによって一層徹底した真理の体系的認識となる。

然るに、「綜合哲学」と「進化論」はどのような関連を有するのであろうか。スペンサーは十九世紀における進化哲学或は社会進化論の代表者と見做されている。そして彼が進化論の真理性を確信し主張するようになった事由には、直接間接に様々な背景が考えられるが、しかしここではそうした観点からの考察とは別に、純粋に思想的関心事から両者が如何なる内的連関を有するかについて見てみたい。

スペンサーの進化論は、その妥当範囲、起源、思想的意味等において、ダーウィンの進化論とは相異している。つまり、ダーウィンの進化論は本来生物の発生一般についてのいわば生物学説（生物進化論）であるが、[16] スペンサーの進化論は宇宙の（宇宙生成から生命、精神に至るまでの）あらゆる現象の発生・変化万般に妥当し、それらを根底から支配する根本原理として宇宙論的性格を強くもっている。換言すれば、それは単なる一生物学説に留まらず、一種の宇宙論的意味を有している。しかしながら「進化」という現象は、他の何ものにもまして有機体において最も明確に現われ、典範的に見られるが故に、スペンサーは「進化」を「有機的進化」（organic evolution）の意味において把握し、実際にはかかる視点から彼の進化思想を展開している。

では、「有機的進化」とは何を意味するのであろうか。生物学的には「進化」の概念或は原因は様々に規定され説明され得るのであるが、そのいずれにしても進化論は、目的論的見方を排して、生物の起源、発生或は変化等について機械論的見方から成立した学説乃至思想である。そしてこの点に、進化論と宗教思想（特にキリスト教的創造説＝特殊創造説）との根本的相異・対立が存するのである。科学哲学の性格を有するスペンサーの進化論においてもその点は同様である。つまり、スペンサーの哲学は全体として事象の機械論的見方で貫徹されている。かかる立場からスペンサーは、「進化」（evolution）若しくは「進歩」（progress）を有機体の成長過程において見られる如き「構造上の同質性から異質性への変化・発展」であると把握して、有機体進歩の法則が一切の進歩の法則であることを明らかにしようとした。スペンサーは有機的進化について次のように語っている。

いかなる胚種も、最初の段階では、組織の点でも化学的組成の点でも全く均質な物質から成る。この物質の二つの部分間に相違が現われることが最初の一歩である。……この現象は、分化である。分化した部分の一つ一つにも、間もなく差異が生じ始め、やがて、この第二次分化が最初の分化と同様に明確なものとなる。このプロセスは絶え間なく繰り返され、成長する胚種のあらゆる部分で同時に進行し、そして、こうした無限の分化によって、ついに、成熟した動植物を構成する組織や器官の複雑な結合が生まれる。これは、あらゆる有機体の歴史である。有機体の進歩が同質から異質への変化であることは議論の余地がない。……地球、地球上の生命、社会、政治、製造、貿易、言語、文学、科学、芸術、そのいずれの発展においても、単純なものが順次の分化を経て複雑なものに至るこの同じ進化が遍く見られる。辿り得る限り最も古い宇宙の変化から文明の最新の成果に至るまで、同質から異質への変化が進歩の根本であることがわかるであろう。[17]

要するに、「有機的進化」とは、有機体の胚種から成熟体への成長過程において最も典範的に見られる、物質と運動の反復的再配合（分化と綜合）によって生起する「構造上の同質性から異質性への変化」の謂であるが、それは、均一性から多様性、単純なものから複雑なもの、低次なものから高次なものへの分化発展をも含意している。そして、「有機的」とは部分と全体及び部分と部分の不可欠的相互依存性の上に成立する如き存在のあり方を意味するが故に、「有機的進化」とはまた「構造に関する部分と全体の相互依存性における単純から複雑、低次から高次への変化」として捉え得る。しかも有機体進化の法則が他の一切の進化の法則であると考え得るならば、有機的進化の法則を根本原理として、宇宙の諸現象の発生、生成変化万般について、これを発展的・綜合的に把握し説明することが可能であろう。かかる進化論的宇宙論乃至世界観は正しくスペンサーが『綜合哲学体系』において企図しようとしたものである。つまり、『綜合哲学体系』は、宇宙の諸現象（物理、生命、精神、社会、倫理）を進化の観点から順次追構成することによって、宇宙進化の多様な過程を綜合的に解明しようとした。しかもそれが「体系」という形態を取って成立しているのは、進化したものの諸断片を再構成することによって多面的な進化の過程を追究しようとしたからである。しかし半面、そのことは、ベルクソンの指摘した如く、進化という事象それ自体を説明したことにはならない。[18]即ち、『綜合哲学体系』は、進化そのものを解明することを企図したのではなく、宇宙の多面的な諸現象を根源的力の多様な発

現として進化の観点から統一的、包括的に解釈をし、以て進化論的世界観の真理性を主張しようとした進化思想である。『綜合哲学体系』の着想が生れた事情をスペンサーは次のように語っている。「私はその前年中に星雲の起源から言語や科学や芸術の起源に至るあらゆる種類の現象を通じて、常に単純なものから複雑なものへ、均一なものから多様なものへの変化が行われることを示していたから、これ等のさまざまの普遍的真理は明らかに一つの普遍的な変化［つまり、有機的進化］の諸側面であるという考え方が自然に生まれたのである。それならば、正当なやり方は、その諸側面を明らかにすることに違いない。すなわち、天文学、地質学、生物学、心理学、社会学および社会的な諸産物を進化の観点から順次に取り扱うことである。明らかにこのような物質と運動との不断の再分配が従う力の普遍的な諸法則は、以上の具体的な諸科学の連鎖を構成するものであり、諸科学を一つの全体の諸部分として結びつけるのである。このようにしてその連鎖を明らかにしようという考え方が生まれた」[19]と（［　］内及び傍点は筆者付記）。要するに、『綜合哲学体系』は、有機体進化の観点から、諸科学の真理を整合し統合的に把握しようとする、進化論的真理の認識体系であると言い得るであろう。『綜合哲学体系』の部分を構成する『第一原理』、『生物学』、『心理学』、『社会学』、『倫理学』は、それぞれ部分と全体とのこのような有機的連関性をもって成立しているのである。

註

テキストは、The Works of Herbert Spencer, Osnabrück/Otto Zeller, 1966. を使用した。

① Progress: its Law and Cause, The Works of H. Spencer XIII, p. 60.

② Ibid., pp. 61-62.

③ What Knowledge is of most Worth?, The Works of H. Spencer XVI pp. 53-54.

④ 清水幾太郎『世界の名著』46コント・スペンサー、解説三三—三四頁参照。

⑤ 山下重一訳、『国学院大学法学会』第12巻第3号所収、「思想的自叙伝（ハーバート・スペンサー）」五九頁参照。

⑥ この箇所は、スペンサー自身の言表ではなく、当時ダーウィンの進化論の最もよき理解の一人であり且つ熱心な代弁者であった生物学者T・ハックスリーの講演の一部をスペンサーが引用したものである。しかし、かかる見解はスペンサー自身の考えと根本的に一致するものと見做し得る。

⑦ What Knowledge is of most Worth? op. cit. pp. 50-52.

⑧ Ibid., p. 50.

⑨ See First Principles, The Works of H. Spencer I, pp.

15–17.

⑩ See What Knowledge is of most Worth?, op. cit. p. 54.

⑪ See The Genesis of Science, The Works of H. Spencer XIV, pp. 1–73.

⑫ What Knowledge is of most Worth?, op .cit. p. 54.

⑬ 前掲書、思想的自叙伝（The Filiation of Ideas の邦訳）八一―八二頁。

⑭ 同書、八二頁。

⑮ 同書、八五頁。

⑯ もっとも、ダーウィンの進化論は、実際には単に一生物学説の問題に留まらず、キリスト教信仰史上かつて他に類を見ない程最も深酷な衝激を与え、今日に至るまでその問題は真に思想的解決を見い出し得ないでいる。つまり、それは根本的には「科学と宗教」の問題として今日的課題である。

⑰ Progress: its Law and Cause, pp. 9–10.

⑱ 松浪信三郎、高橋允昭共訳、ベルクソン全集4『創造的進化』（白水社）、四〇八頁以下参照。

⑲ 思想的自叙伝、七八頁。

（本学専任講師　英文学）